

英会話授業における「自尊感情を高める共有体験」に関する調査

－学生の内的要因に着目して－

A Survey on “Students’ Self-esteem Improvement Through Class Cooperation Experiences” in English Conversation Classes:

Focus on Internal Factors of Learners

熊田岐子・岡村季光・オチャンテ・カルロス

Michiko KUMADA, Toshimitsu OKAMURA, Carlos OCHANTE

要旨：本稿では、熊田・岡村（2018）で着目した「基本的自尊感情を育む共有体験」（近藤、2010）を応用し、英語スピーキングの共有体験に関する調査を行った。「自尊感情を育む共有体験」として、英語スピーキングを場面と定め、他者とのコミュニケーションにおける英語スピーキング不安を検証した。具体的には、ペアワーク、グループワーク、クラス発表を場面として設定した。考案した項目を因子分析した結果、ペアワーク、グループワークにおいては「肯定承認」、「安心」、「忌避」、クラス発表においては「肯定承認」、「不得意」の構造を見いだした。さらに、英語スピーキング不安、対人不安傾向、自尊感情、自己受容、他者受容との関連を検討し、他者からのフィードバックが得られるグループワークが有効である可能性が示唆された。今後の展望として、他者からのフィードバックとして、信頼する人、すなわち教師がすべきフィードバックについて検討することが課題として残された。

キーワード：英語スピーキング不安、「外国語活動」・「外国語」、肯定承認、フィードバック

1. はじめに

これまで筆者らは、小学校英語の教科化に向けて、将来英語授業を行うこととなる教職課程生の英語スピーキング不安を中心に検証してきた。先行研究によれば、外国語学習不安を引き起こす要因はスピーキング不安にある（Young, 1991）ためである。将来的に英語授業を実施することになる教職課程生の外的要因である英語運用力養成のためには、まず内的要因である現在のスピーキング不安に対処することが先決であると考えた。さらに、本研究を進める過程で、スピーキング不安が高い学生ほど、自尊心が低いことが表れてきた。本稿では、本研究を深めるために、熊田・岡村（2018）で着目した「基本的自尊感情を育む共有体験」（近藤、2010）を応用し、英語スピーキングの共有体験に関する調査を行う。ここで述べる英語スピーキングとは、他者との関係性から引き起こされる自尊心の欠如を取り扱うため、英語での他者とのコミュニケーションを含むこととする。

本調査では、英会話授業における感情の共有体験が英語スピーキングにどのような影響を及ぼすのかを明らかにしたい。

2. 研究背景

2.1 他者とのコミュニケーションに関する外国語学習不安

これまで熊田・岡村（2017、2018）において、外国語学習不安、特に、スピーキング不安についての先行研究を概観してきた。その中で、着目したいのは、“the fear of speaking in a foreign language may be related to a variety of complex psychological constructs such as communication apprehension, self-esteem, and social anxiety. (Young, 1990: 540)” との言葉である。つまりは、「コミュニケーション不安」（“communication apprehension”）という他者とのコミュニケーションに対する恐れ・不安と「自尊心」（“self-esteem”）の欠如、「社会的不安」（“social anxiety”）が入り混じっている点である。これらのような要素が複雑に絡み合いスピーキング不安を生むというのである。

また、他者とのコミュニケーションに関する先行研究には、“willingness to communicate（以下、WTC）”という概念がある。WTCとは、「第二言語を用いて他者と対話する意思（p.13）」（八島、2004）である。WTCは、その場の状況によっても、影響を受けており、その時話す相手によって自信をもって話せるかどうかの問題だということである。

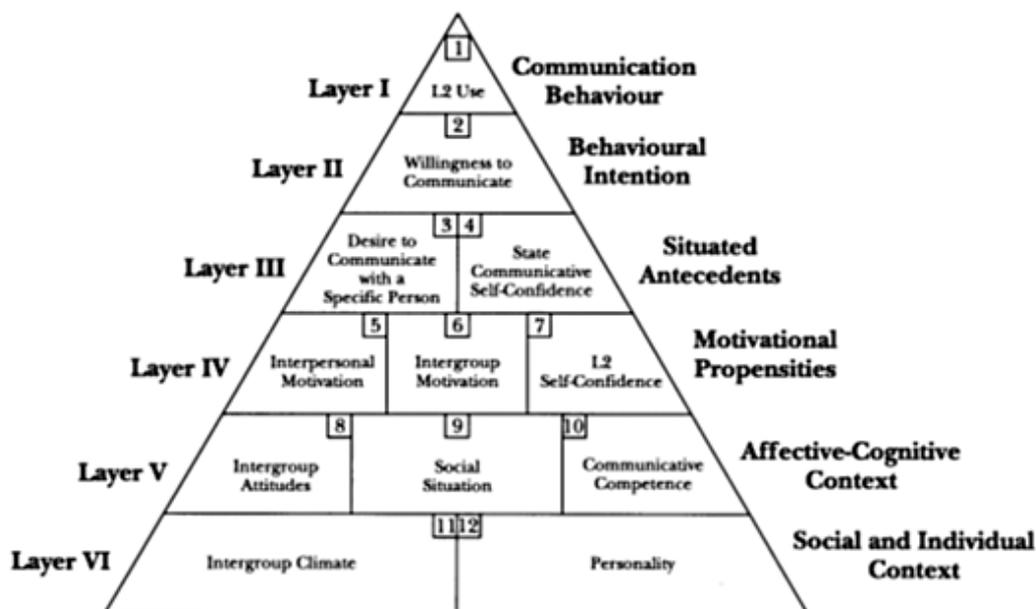


図1. WTCに影響を及ぼす要因（MacIntyre, et al, 1998: 547からの抜粋）

八島（2003）は、図1を、「異文化間の態度・接触動機など民族間の関係や社会状況に影響を受ける要因と、性格や第二言語能力・自信など個人の要因が、複雑に合わさって第二言語使用に影響を与える様相を表そうとした。第二言語のコミュニケーションには、英語力、自分の英語力に対する自信（あるいは自信のなさ）、異文化間の関係など、第一言語（母語）でのコミュニケーションよりはるかに多くの要因が複雑に絡むのである。この複雑さをモデルは良く捉えている。（p.87-88）」と説明する。本研究は、このように社会心理学的にコミュニケーションを捉えるWTCにおいては、図1の“7. L2 Self-Confidence”に注目した研究とも言える。

2.2 「基本的自尊感情を育む共有体験」（近藤、2010）の応用

「基本的自尊感情」とは、熊田・岡村（2018）で取り上げたように、「生きることに価値を見いだせるかに関する

自尊感情」である。ここで述べる「共有体験」とは、近藤（2010：113）を参考にすると、具体的事象を他者と共同して所有する体験と言えよう。近藤（2010）では、生きることに関する共有感が自尊感情にどのような影響を与えるかを検証している。本研究では、この「基本的自尊感情を育む共有体験」を応用して、英語スピーキングにおける不安に関する共有、英語スピーキングの他者からの受容に関する感情について、他者とのコミュニケーションにおける英語スピーキング不安がどのように変化するかを検討したい。

3. 研究課題

「自尊感情を育む共有体験」として、英語スピーキングを場面と定め、他者とのコミュニケーションにおける英語スピーキング不安の変化を検証する。

4. 方法

4.1 調査協力者

調査協力者は、小学校教育課程に在籍する1年次生の大学生109名（男子66名、女子43名）、平均年齢は18.84歳（SD.48）であった。

4.2 調査内容

年齢・性別の明記を求めるフェイスシートの他、下記項目を印刷したA3判調査用紙を用意した。

a. 現在の英語スピーキング不安尺度（熊田・岡村、2017） 現在英語学習者として感じる英語スピーキングにおける不安を測定する尺度である。単一因子13項目で構成されており、5件法の回答が用意されていた。選択肢は、「5：そう思う 4：まあそう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない」であった。

b. 英語スピーキングにおける共有体験尺度（以下、共有体験尺度） 近藤（2010）をもとに、英語と心理学をそれぞれ専門とする教員が、英語の時間における「ペアワーク」「4人程度のグループワーク（以下、グループワーク）」「クラス全体の前で英語を使って発表（以下、クラス発表）」することを想定し、各9項目を考案（表1～3参照）した。回答は5件法が用意されていた。選択肢は、「5：そう思う 4：まあそう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない」であった。

c. 対人不安傾向尺度（松尾・新井、1998） 下位尺度として「否定的評価懸念」7項目、「情動的反応性」6項目、「対人関与の苦痛」5項目、合計21項目で構成されており、4件法の回答が用意されていた。選択肢は、「4：とてもあてはまる 3：すこしあてはまる 2：あてはまらない 1：ぜんぜんあてはまらない」であった。

d. 自尊感情尺度（山本・松井・山成、1982） 1因子構成の10項目で構成されており、5件法の回答が用意されていた。選択肢は、「5：あてはまる 4：ややあてはまる 3：どちらともいえない 2：ややあてはまらない 1：あてはまらない」であった。

e. 自己受容尺度（櫻井、2013） 本研究では、「全体としての自己の受容」（以下、自己受容）因子のみを使用した。7項目で構成されており、5件法の回答が用意されていた。選択肢は、「5：とてもあてはまる 4：ややあてはまる 3：どちらともいえない 2：あまりあてはまらない 1：まったくあてはまらない」であった。

f. 存在受容感尺度（高井、2001） 本研究では「他者からの受容感」（以下、他者受容）因子のみを使用した。6項目で構成されており、5件法の回答が用意されていた。選択肢は、「5：とてもあてはまる 4：ややあてはまる 3：どちらともいえない 2：あまりあてはまらない 1：まったくあてはまらない」であった。

4. 3 調査方法

4. 1の調査協力者を対象に、英会話の授業中に、4. 2で示した尺度が印刷された質問用紙を配付し、一斉実施及び回収を行った。

なお、調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないこと、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益になることは決してないことを明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行ったうえで、実施した。

5. 結果と考察

5. 1 共有体験尺度における信頼性の検討

ペアワーク、グループワーク、クラス発表を想定した共有体験尺度各9項目について、それぞれ平均値及び標準偏差 (SD) を算出し、反復主因子法による因子分析を実施した。負荷量が|.40|以上を基準とし、基準値に満たさない項目を除いた結果を表1～3に示す。ペアワーク、グループワークにおいて、下位尺度内項目の傾向から第1因子は「肯定承認」、第2因子は「安心」、第3因子は「忌避」とそれぞれ命名した。クラス発表において、第1因子は「肯定承認」、第2因子は「不得意」とそれぞれ命名した。信頼性を示すクロンバックの α 係数は、それぞれおおよそ満足できる内的整合性が確認できた。

5. 2 共有体験尺度と諸概念との関連

共有体験尺度との関連を検討するため、英語スピーキング不安尺度、対人不安傾向尺度の「否定的評価懸念」、「情動的反応性」、「対人関与の苦痛」、自尊感情尺度、自己受容尺度、他者受容尺度との関連において、ピアソンの相関係数を算出した。結果を表4に示す。

英語スピーキング不安は、各状況における「肯定承認」、「忌避」及び「不得意」と弱い正の相関がみられた。「肯定承認」と英語スピーキング不安の関連がみられたのは、自らが英語スピーキングに不安を抱えているなかで、誰かに自らの英語スピーキングを他者に認めてもらうことで安心を感じたいという表われであると考えられる。

表1 共有体験尺度の因子分析結果（「ペアワーク」の想定、プロマックス回転後）

	I	II	III	共通性	M	(SD)
第1因子 肯定承認 ($\alpha = .74$)						
6 信頼する人に、英語スピーキングを肯定してもらいたい。	.84	-.09	-.11	.69	3.06	(1.17)
5 不特定多数の人に、英語スピーキングを肯定してもらいたい。	.77	-.12	-.03	.58	2.79	(1.12)
4 クラスメイトに英語力を肯定してもらえると安心する。	.61	.27	.19	.50	3.27	(1.02)
9 例えどのような英語スピーキングであっても相手に受け入れてほしい。	.40	.03	.04	.16	3.33	(1.14)
第2因子 安心 ($\alpha = .87$)						
2 クラスメイトと英語のレベルについて話すときと安心する。	-.07	.96	.08	.85	3.14	(1.21)
1 クラスメイトとの英語でのやり取りは安心する。	.07	.77	-.21	.77	3.50	(1.28)
第3因子 忌避 ($\alpha = .63$)						
8 クラスメイトと英語について話すのが嫌いである。	.05	-.02	.70	.51	2.60	(1.20)
3 私には、クラスメイトと英語でやり取りする自信がない。	-.02	-.04	.64	.43	2.53	(1.16)
(分析から外れた項目)						
7 クラスメイトとの英語でのやり取りについて、ひとりで反省する。					2.44	(1.20)
因子寄与	1.89	1.82	1.22			
因子間相関						
I	-	.18	-.02			
II		-	-.34			

表2 共有体験尺度の因子分析結果（「4人程度のグループワーク」の想定、プロマックス回転後）

	I	II	III	共通性	M	(SD)
第1因子 肯定承認 ($\alpha = .80$)						
5 不特定多数の人に、英語スピーキングを肯定してもらいたい。	.85	-.07	-.01	.67	2.87	(1.11)
6 信頼する人に、英語スピーキングを肯定してもらいたい。	.81	-.05	-.01	.62	3.12	(1.17)
4 クラスメイトに英語力を肯定してもらえるようにすると安心する。	.71	.25	.15	.73	3.15	(1.10)
9 例えどのような英語スピーキングであっても相手に受け入れてほしい。	.49	-.02	-.15	.23	3.28	(1.14)
第2因子 安心 ($\alpha = .84$)						
2 クラスメイトと英語のレベルについて話すとう安心する。	.01	.85	.06	.70	3.24	(1.25)
1 クラスメイトとの英語でのやり取りは安心する。	.00	.84	-.14	.80	3.53	(1.21)
第3因子 忌避 ($\alpha = .62$)						
8 クラスメイトと英語について話すのが嫌いである。	-.17	.06	.86	.69	2.59	(1.14)
3 私には、クラスメイトと英語でやり取りする自信がない。	3.18	-.17	.50	.36	2.73	(1.24)
(分析から外れた項目)						
7 クラスメイトとの英語でのやり取りについて、ひとりで反省する。					2.53	(1.16)
因子寄与	2.41	2.02	1.28			
因子間相関	I	II	III			
	I	-.38	.15			
	II		-.31			

表3 共有体験尺度の因子分析結果（「クラス全体の前で英語を使って発表」の想定、プロマックス回転後）

	I	II	共通性	M	(SD)
第1因子 肯定承認 ($\alpha = .86$)					
6 信頼する人に、英語の発表を肯定してもらいたい。	.92	-.09	.77	3.29	(1.09)
5 不特定多数の人に、英語の発表を肯定してもらいたい。	.88	-.10	.68	3.02	(1.09)
9 例えどのような発表であってもクラスメイトから受け入れてほしい。	.63	.02	.41	3.22	(1.20)
4 英語で発表したときに、クラスメイトが受け入れてくれると嬉しい。	.62	.36	.75	3.80	(1.16)
第2因子 不得意 ($\alpha = .74$)					
3 今の自分の英語の発表で満足すべきではないと思う。	.04	.81	.68	3.75	(1.28)
2 自分は他のクラスメイトよりも英語が得意でないと思う。	-.13	.78	.52	3.78	(1.27)
(分析から外れた項目)					
1 クラスメイトの前で、英語で発表することは安心する。				2.11	(1.05)
7 英語で発表した後に、ひとりで反省する。				2.72	(1.24)
8 クラスメイトと自分の英語の発表について話すのが嫌いである。				2.93	(1.18)
因子寄与	2.80	2.07			
因子間相関	I	II			
	I	-.53			

対人不安傾向尺度における「否定的評価懸念」は、ペアワークにおける「肯定承認」、「忌避」、グループワークにおける「忌避」と弱い正の相関、グループワークにおける「安心」と弱い負の相関がみられた。また、「情動的反応性」は、各状況における「肯定承認」と弱い正の相関がみられた。「忌避」と「否定的評価懸念」、「情動的反応性」の関連がみられたのは、対人不安が主観的に自分の社会的スキルが不足していると感じていることによって起こった (Leary, 1983) ものと考えられる。なお、「対人関与の苦痛」はいずれも有意な関連はみられなかった。

自尊感情は、グループワークにおける「安心」と弱い正の相関、グループワークにおける「忌避」と弱い負の相関がみられた。これは、英語に対する苦手意識に加え、グループワークにおける他者からの評価懸念が自尊感情を下げる一方、グループワーク内で形成された安心感が自尊感情を上げた可能性が示唆され、熊田・岡村 (2017) の結果と符合するものと考えられる。ペアワークとクラス発表で自尊感情の関連がみられなかったのは、ペアワークにおいて、グループワークに比して多くのフィードバックがないため、クラス発表において、自らがスピーチをするのみで、その場でクラスメイトからのフィードバックが少ないことがそれぞれ考えられる。

自己受容はいずれも有意な関連はみられなかった。一方、他者受容は、クラス発表における「不得意」と弱い正

の相関がみられた。これは、肯定的承認を得ることが自らの不安要素を和らげるため、他者を受容してあげたいというペア及びグループ内への他者配慮から来るものともとれる。

肯定承認を求めるのがいずれの場面でみられたのは、自尊感情の回復がまずキーワードになってくるということである。中でも「信頼する人に～してもらいたい」は教師への思いとも受け取れる。

表4 共有体験尺度と諸変数との関連 (r) ($n = 99 \sim 102$)

	ペアワーク			グループワーク			クラス発表	
	肯定承認	安心	忌避	肯定承認	安心	忌避	肯定承認	不得意
英語スピーキング不安	.39**	-.07	.30**	.35**	-.06	.29**	.35**	.36**
否定的評価懸念	.23*	-.18	.32**	.17	-.20*	.30**	.15	.18
情動的反応性	.22*	-.04	.16	.24*	-.07	.15	.21*	.18
対人関与の苦痛	.08	-.08	.19	.08	-.08	.17	.04	.10
自尊感情	-.01	.12	-.14	-.01	.24*	-.23*	.07	-.09
自己受容	.00	-.01	-.04	.04	.17	-.16	.12	.13
他者受容	.12	.07	-.10	.04	.11	-.18	.18	.31**

* $p < .05$, ** $p < .01$

6. おわりに

斎藤 (2010: 118) には、乳児期の情動の共有体験 (母と子どもなど) が重要であることが述べられているが、自尊感情の回復を目指した授業においても、情動の刺激が必要であると筆者らは考えている。肯定的なフィードバック、つまり褒められてうれしいという情動の刺激こそ、自尊心の低い英語スピーキング不安を抱える学生に必要なのではないだろうか。今後の展望として、他者からのフィードバックとして、信頼する人、すなわち教師がすべきフィードバックについて検討することが課題として残された。

引用・参考文献

- Elaine, K., Horwitz, M. B., & Gorwitz, J. C. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70, 125-132.
- MacIntyre, P. D., Clement, R., Dornyei, Z., & Noels, K. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *The Modern Language Journal*, 82, 545-562.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding Social Anxiety: Social, Personality and Clinical Perspectives*. Beverly Hills: Sage Publications (リアリイ, M.R. (著) 生和秀敏 (監訳) (1990). 対人不安 北大路書房)
- Young, D. J. (1990). An investigation of students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23(6), 539-553.
- Young, D. J. (1991). Creating a low-anxiety classroom environment: What does language anxiety research suggest? *The Modern Language Journal*, 75(4), 426-437.
- 熊田岐子・岡村季光 (2017). 「英語スピーキングに対する不安尺度作成 - 小学校英語の教科化に向けて -」『奈良学園大学紀要第7集』、67-74.
- 熊田岐子・岡村季光 (2018). 「学生の外的要因と内的要因に着目する「外国語の理解」「外国語科指導法」に関する一考察」『奈良学園大学紀要第8集』、33-40.
- 小林明子 (2007). 「第二言語教育における Willingness to Communicate に関する研究の動向」『広島大学大学院教

- 育学研究科紀要. 第二部, 文化教育開発関連領域], 285-293.
- 近藤卓 (2010). 『自尊感情と共有体験の心理学－理論・測定・実践』. 金子書房.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1998). 「児童の対人不安傾向と公的自己意識、対人的自己効力感との関係」. 『教育心理学研究』, 46(1), 21-30.
- 櫻井英未 (2013). 「女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係」. 『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』, 19, 125-142.
- 高井範子 (2001). 「他者からの受容感と生き方態度に関する研究－存在受容感尺度による検討－」. 『大阪大学教育学年報』, 6, 245-254.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 「認知された自己の諸側面」. 『教育心理学研究』, 30(1), 64-68
- 八島智子 (2003). 「第二言語コミュニケーションと情意要因: 「言語使用不安」と 「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」 についての考察」. 『関西大学外国語教育研究』, 5, 81-93.
- 八島智子 (2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機－研究と教育の視点－』. 大阪: 関西大学出版部.